CHIHOUKISHI HANS NO JYUNAN

地方騎士ハンスの受難

2

AMARA

アマラ

主な登場人物
Main Characters
ケンイチ
一人目の日本人。農業高校出身で、凶悪な魔獣を手懐ける能力を持つ、粋なリーゼント男。北海道出身。
レイン
ハンスを異常なまでに慕う元部下の女騎士。普段は仮面のような無表情だが、実際は感情の浮き沈みが激しい。
イツカ
新たにトリップして来た五人目の日本人。ダンジョンマスターとして無生物にあらゆる機能を付与できる。鳥取県出身。
ミツバ
三人目の日本人。外見は可愛らしい美少女だが、大食い&怪力が自慢のトラブルメーカー。島根県出身。
ハンス
本編の主人公。都では〝魔術師殺し〟の異名を誇る凄腕騎士団長だったが、貴族間での政争に背を向け、自ら辺境の地方騎士に志願する。
キョウジ
二人目の日本人。オタクで気弱な性格の高校生だが、どんな怪我でも回復させる魔法が使える。東京都出身。
コウシロウ
四人目の日本人。元極道にして千里眼の能力を持つ料理人。静岡県出身。

1　湯煙と温泉を思い出す男女

地方騎士ハンス・エスラーが治安を守る小さな街に、隣国の魔獣実験部隊が押し寄せてきた騒動からしばらくの時間が経った。

領主であるロックハンマー侯爵が出張るまでの騒ぎに発展したものの、ハンスに加え、ケンイチ、キョウジ、ミツバ、コウシロウら日本人達の活躍により街は無事守られ、今ではすっかり落ち着きを取り戻していた。

日本人達もそれぞれの仕事に戻り、それなりに忙しい日々を送っている。

ケンイチの魔獣牧場は経営が軌道に乗って、どんどん大きくなっていた。

なんでも、ロックハンマー侯爵の領主館がある街に食用魔獣肉の加工品を出荷する取引が決まったらしく、途轍もなく慌ただしくしている。

キョウジも、同じく各地を奔走していた。いつの時代もどんな場所でも、医療に携わる人間というのは必要とされているのだ。

ミツバも、何故か二人と同じようになんだかんだでバタバタと走り回っていた。

主に、この街の治安を守る自衛隊のメンツを先導してろくでもない面倒を引き起こしたり、それ

が原因でハンスに叱られに行かなくてはならなかったりがその理由だ。
コウシロウも、店が繁盛しているためなかなか多忙な生活をしていた。試作中の銃の出来栄えが良くなっていることもあって、私生活の方も張りが出てきている様子だ。
こんなふうに日本人達の生活が充実していくにつれ、ハンスの仕事にも変化が起きていた。仕事の量が、目に見えて減ったのである。力仕事や巡回はミツバと自衛隊が対応しているし、森や山の魔獣はケンイチを恐れて下りて来ない。つまり、そのほとんどを、日本人達が肩代わりしてくれているのだ。
ならば書類仕事はと言えば、こちらは別の人間が片付けていた。
緊急連絡要員、兼、徴税監督官として街に残った、レイン・ボルトだ。
ハンスは地方騎士としてこの街に赴任して来るとき、騎士の称号を持つ者を部下にすることを禁止されている。そのためレインの役職は、ハンスよりも上になっていた。だが、レインはハンスの生抜きの部下であり、生粋のハンス信者だ。
この街では中央の目があるわけではないので、当然のようにハンスの指示を受けて活動をしている。
そのレインがハンスの書類仕事を一手に引き受けたのは、元騎士団長であり、崇拝するハンスに地味な仕事をさせることをレインのプライドが許さなかったからである。
そんなこんなで、ほとんど仕事がなくなってしまったハンスは、最近では日がな一日街を巡回し

たり、剣の訓練をしたりしてすごしていた。
その訓練の相手はというと、もっぱらミツバと自衛隊の面々、そしてコウシロウにケンイチの部下の魔獣達だ。
暇なら暇で、ゆっくりしていればよさそうなものだが、じっとしていられないのがハンスの性分らしい。
そうこうするうちに、暇つぶしであったはずの訓練にいつの間にか熱が入り始めていた。地方騎士としての仕事がない分、自衛隊や魔獣の訓練に意識が向かったのである。
元騎士団長であるハンスの指導の下、自衛隊と魔獣達はメキメキと実力をつけていた。
実家との関係上、ハンスは部下や戦力は持てないのだが、自衛隊は公には、兵力ではないし、魔獣達の存在は王都に報せていない。鍛え上げたとしても、問題はない。
それに、この間のように隣国の実験部隊が攻め入って来ることがあるかもしれない。そういった場合、彼らは大いに活躍してくれるはずなのだ。
何より、ハンスには懸念していることがあった。それは、まだ見ぬ新しい日本人の登場である。今までの日本人は、皆この世界の人間に対して好意的だった。だが、今後現れる日本人全てがそうとは限らない。
もしも、敵対的な日本人が現れたら――。
そのときは、何らかの対抗措置をとらなければならないだろう。

今までの経緯を考えると、特殊な能力を持つ日本人が現れる確率が一番高いのは、この街周辺なのである。
備えあれば憂いなし、というわけだ。
そんな、ある日のことだった。
駐在所でレインが仕上げた書類に目を通していたハンスのもとに、コウシロウが訪ねて来た。
千里眼を持つコウシロウは、異変を真っ先に察知する人物だ。
一体何事かと戦々恐々とするハンスに、コウシロウはにっこりと笑顔で告げる。
「いやぁ、実は、味噌と醤油の大樽が完成しましてねぇ」
緊張が弛み、ハンスはがっくりと膝から崩れ落ちる。
一瞬、「そんなものどうでもいい」と口に出しかけたが、すぐに日本人三人組がやたらとその二つを楽しみにしていたことを思い出した。
「ケンイチ達には報せたんですか？　俺よりも彼等に教えた方が喜ぶと思いますが」
「いやぁ、報せたんですけどねぇ」
コウシロウは頬を引きつらせながら、外の方へ顔を向ける。そんな様子を見て、ハンスも首を傾げつつ駐在所から顔を出した。
コウシロウの見ている方向へ視線を移したハンスの表情が、凍りつく。
建物の屋根と屋根の間を身軽な妖怪のように飛び越えて、あちこちに跳ね回っている人影を発見

したからだ。
そんな人外な動きが可能なのは、この街には一人しかいない。
もちろん、超身体能力を持つ、ミツバである。
「あの娘は……!!」
「大樽の味噌と醤油が完成したので、今後は量も品質も安定して供給できるという話をしたんですがねぇ。そうしたらまぁ、あのとおり、すこぶるテンションが上がってしまったようでしてねぇ」
「とりあえず、止めにいきましょうか」
「助かります」
わなわなと拳を震わせるハンスに、コウシロウはただただ苦笑いを浮かべるのであった。

ミツバを拳で静かにさせた後、ハンスはコウシロウから食事に誘われた。
味噌と醤油の量産化を祝う会なのだそうで、その二つを使った料理をたくさん用意するという。
遠慮しようかと思っていたハンスだったが、続く言葉に考えを改めた。
「レインさんもお招きしようと思っていましてねぇ。ハンスさんに来ていただけないと、レインさんはいらっしゃれないでしょうから」
確かにハンスが行かなければ、レインは遠慮して顔を出さないだろう。
どういう訳か、レインも味噌と醤油の完成を楽しみにしていた。

ハンスもそれを知っていたので、参加させてやりたいと考えたのだ。
「ならば、遠慮なくご相伴に与らせてもらうとしましょう」
「はいはい。お二人には、いつもお世話になっていますからねぇ。腕によりをかけますよ」
「期待していますよ。コウシロウ殿の料理は美味いですからね」
自分の腕を叩いてみせるコウシロウに、ハンスはおかしそうに笑い声を上げた。
コウシロウも、いつものニコニコとした笑顔を返す。
そこで、ふと思い出したように、ハンスが眉根を寄せた。
「そういえば、レインのやつ、なんであんなにミソとショウユを楽しみにしてたんだろうな」
ハンスの記憶では、レインは一度か二度しかそれらを口にしていないはずなのだ。
にも拘らず、首を長くして、完成を心待ちにしていたのである。
もしかして、よほど口にあったのだろうか。
今度本人に聞いて確かめてみよう、とハンスは考えた。
もっとも、レインの口からその本当の理由が語られることはないだろうが。

宴会の会場は、コウシロウの店の二階にある部屋だった。
参加者は、ケンイチ、キョウジ、ミツバ、コウシロウに、ハンスとレインの計六名。
部屋にはまだキョウジとミツバしか居ない。

中央に置かれたテーブルの上にはすでに料理が並べられており、美味そうな匂いをさせている。
どれもこれも、コウシロウが腕によりをかけたものばかりだ。
「うんまそぉーうっす！　焦げた醤油特有の芳ばしい香り！　まるで故郷に帰って来たかのような心落ち着く味噌の風味！　郷愁を誘い、理性を破壊しにかかってるっす！　マジかなぐり捨てンぞ、とか叫ぶレベルっす！　破壊力ばつ牛ンっす！」
「落ち着いて。ていうか、どういう語彙してるの」
大興奮するミツバを、キョウジは若干引き気味になだめる。
放って置くと料理に突撃していくので、止めておかなければならないのだ。
まあ、いよいよ我慢できなくなれば、キョウジぐらい片手で吹き飛ばして料理を貪り食うと思われるので、気休めなのだが。
「料理できる人ってすごいっす！　美味しいものが作れるっていうのは、それだけで誰かを幸せにできるっす！　世界中のみんなを幸せにできる魔法だと思うっす！」
「うん、まあ、そうだね。でもミツバちゃんが言うと、何かモヤッとするのは何でだろう？」
キラキラとした目で料理をガン見するミツバ。その横で、納得がいかない様子で首を傾げるキョウジだった。
そのとき、ドアが開く音がして、キョウジは振り返る。
そこにいたのは、酒瓶を手にしたレインだった。

「こんばんは。ああ……。これは豪華ですね」
「レインさん！　こんばんわーっす！」
「ああ、こんばんは」
部屋に入って来るレインに、ミツバとキョウジが挨拶を返す。
レインの顔に表情はない。淡々とした様子なのだが、それはいつものことだ。
キョウジもミツバも、気にしていない。
テーブルの前まで来たレインは、並べられた料理をしみじみと眺めた。
本人以外、知らない事実であるが、レインは生まれ変わる以前の記憶を持った、いわゆる転生者であった。
転生前に暮らしていたのは、地球の日本。
つまり、ケンイチ達と同じ日本人だったのである。
目の前の味噌や醤油がふんだんに使われた料理の品々は、二度と目にすることはないだろうと諦めていた物ばかりだ。
懐かしい、という一言では足りない、複雑な感情が胸の内側から湧き上がってくる。
レイン自身、これらの料理を再現しようとしたことがないわけではない。
だが、専門知識もないただの農村の娘には、手に負えるものではなかったのだ。
悲しいかな、レインに料理の才能が皆無であったというのもあるのだが。

じっと料理を凝視しているレインを見て、キョウジは苦笑を浮かべた。
事情を知らないキョウジは、レインが見たことのない料理だから眺めていると思ったのだ。
「なんだか茶色とか黒とかばっかりで、美味しそうに見えないかもしれませんが、食べてみると、なかなかのものですよ。コウシロウさんが作ったものですしね」
街でのコウシロウの評判は、かなり高まっていた。
領主であるロックハンマー侯爵からお褒めの言葉をいただいたのも大きいだろう。
コウシロウが作ったものだから、大丈夫だ。
そう、キョウジは言いたかったのである。
レインもそれを察したのか、コクリと一つ頷いてみせた。
「楽しみです」
内心ひやりとするレインだったが、子供の頃から鍛えてきたポーカーフェイスは、まさに鉄壁だ。
料理を目にしていたときに感じていた懐かしさも顔に表れていなかったし、キョウジに突然声をかけられたときの焦りも一切出ていなかった。
「はいはい、お待たせしました」
そう言って部屋に入って来たのは、コウシロウだ。
手に持ったお盆には、さらに幾つもの料理が載せられており、両手が完全に塞がっている。
その傍らで、コウシロウの代わりにドアを開けたのは、片手に酒瓶をぶら下げたケンイチである。

部屋の中を覗き込んだケンイチは、レインの姿を見て大きな声を上げた。
「おお、レインさん来てたんすねぇ。俺、地下室に居たんで気がつかなかったっすわぁ！」
「地下室、ですか？」
表情を変えず首を傾げるレインに、ケンイチは笑いながら手に持った酒瓶を掲げた。
ガラスに色が塗ってあるため、中身の色は分かりにくいが、どうやら透明な液体らしい。
「酒、出してたもんで。地下のほうが保存に向いてるもんですから。こいつぁ、コウシロウさんがためしで作った日本酒って酒なんすけどね。なかなかどうしてイケるんすわぁ！」
「いやぁー。まだまだ納得いかない味なんですがねぇ。どぶろくなら、いいのができているんですが」
コウシロウは苦笑しながら、できたばかりの料理をテーブルの上に並べていく。
ミツバが今にも飛びかからんばかりの表情でそれを狙い、その隣ではキョウジがはらはらした様子でミツバを眺めている。前科があるので、気が気ではないのだ。
ケンイチはそんな二人を見て、大声で笑いながら、レインが持っているものに気がついた。
「レインさんも酒持ってきたんすか？」
「はい。酒屋の前を通ったら、コポ酒が置いてあったので。手土産代わりです」
コポというのは、りんごに似た果物だ。
りんごよりも果汁が多く糖度も高いので、よく酒造りに使われている。

それを聞いたコウシロウは、頭をかいた。
「いやいや、気を遣っていただいて、申し訳ありませんねぇ」
「いいえ。お招きいただいたお礼ですから」
反射的に頭を下げそうになったレインだったが、何とかこらえる。
お辞儀にお辞儀を返すのは、この国にはない文化だからだ。
何がきっかけで転生者であることがバレるか分からないので、細心の注意が必要だろう。
レインは、元日本人の転生者であることを秘密にしているのだ。
周囲に打ち明けたところで信じてもらえないし、頭がおかしいと思われるに違いない。
いつの間にか日本人がわらわらと現れて、突拍子もないことが受け入れられそうになった現在でも、秘密のままにしている。
それに他にも理由は、まあ、いろいろとある。乙女心（？）は複雑なのだ。
そんな会話をしていると、廊下から足音が響いてきた。
少しテンポが速いことから、急いでいるようだ。
全員の注目が、ドアに集まった。
「すまない、遅くなった」
やって来たのは、ハンスだった。やはり走って来たのか、僅かに息が弾んでいる。

その手には、レインが持っていたのと同じ瓶が握られていた。
ハンスはそれを掲げながら部屋に入る。
「土産を用意しようと思ったんだが、何がいいか迷ってな。酒屋の前を通ったら、丁度、旬だというから買ってきたんだ」
「ハンス隊長！　それ、レインさんが持ってきたのと同じっす！　お揃いっす！」
ミツバに指摘されて、ハンスはレインが手にしているものに視線を向けた。それを確認して、大きく目を見開く。そして、「参った」といった様子で頭をかいた。
「そうか。同じものだったか。すまん」
「まあ、どうせどっちも空くでしょうから。だいじょーぶっすよぉ」
「そうですねぇ。なかなか、上等そうなお酒ですし。ありがとうございます」
笑いながらフォローしたのは、ケンイチとコウシロウだ。
普段なら、いの一番に反応しそうなレインだが、ハンスと同じ土産を選んだという些細な一致が無上の多幸感を生み、しばし機能停止していた。
もちろん顔は一切無表情であり、その喜びは外見に微塵も表れていない。
長年培ってきたポーカーフェイスは伊達ではなく、ここでもレインを守ってくれたのだ。
この一件からお互いを意識するようになり――ハンスから愛の告白をされて、美しい緑の丘の上に小さなお家を建てて、幸せに暮らして、――といったところまで妄想を膨らませて、レインは瞬く間に現実の世界に戻って来た。
その間、およそ二秒。
これもまた、日ごろのたゆまぬ恐るべき訓練の賜物だった。
「軽い酒だと言っていましたから、丁度いいと思います。コウシロウ殿もケンイチ殿も、いける口ですし」
「そうか。まあ、飲む人間は四人もいるしな」
そう言って肩を竦めながら、ハンスは瓶をテーブルの上に置いた。
レインも、その横に瓶を並べる。
突然、酒瓶をじっと眺めていたミツバが、元気良く手を上げた。
「はいっ！　ハンス団長！　自分も酒のみたいっす！」
「駄目だ」
「なんでっすか！　理不尽っす！　横暴っす！　職権乱用っす！　パワーハラスメントっす！」
「まぁまぁ、僕らそもそも未成年だし」
地団駄を踏むミツバを、キョウジがやれやれといった調子でなだめる。
一応、二人ともこの国では酒を飲める年齢ではあるのだが、キョウジは日本の基準に従うつもりのようだった。
「しっかし、よくもまぁそろったよなぁ。はじめのうちは、どーなるもんかと思ったけどよぉ」

テーブルの上に載った料理を見て、ケンイチがしみじみと呟く。
レインの転生を例外とすれば、この中で一番最初にこの世界にやって来た日本人はケンイチだ。
魔獣を従えたり、牧場を作ったり、ほかにもいろいろなことをやってきた。
こうしてテーブルに母国の料理が並ぶというのは、感慨深いものであるらしい。
ミツバをなだめながらも、キョウジも大きく頷いている。
コウシロウは、相変わらずニコニコしている。
「でも、こうなるとアレですね。次は、温泉とかが欲しくなりませんか？」
「ああ、いいですねぇ、温泉」
キョウジの呟きに反応したのは、コウシロウだった。
見た目は青年であるコウシロウだが、中身は相変わらずおじいちゃんなのだ。
暴れていたミツバも、温泉という言葉を聞いてその動きをピタリと止めた。
「いいっすねー、温泉！　あったまりたいっす！」
「この街でも風呂ぐれぇには入れんだけどなぁー」
唸りながら、ケンイチは腕を組んだ。
ケンイチの言うとおり、ハンスの住む国には湯に裸で浸かる文化があり、この街にもいわゆる風呂場は存在している。
あまり大きくはないが、日本人がイメージするとおり湯船のある風呂である。

この辺りは水も豊富なので、水運びとお湯炊きの労力さえ厭わなければ、毎日風呂に入ることができた。
「お風呂とは、また違いますからねぇー、温泉は」
「だよなぁー。ゼータクだけどよぉ。こうなるとやっぱ、恋しくなるのが人情だわなぁー」
キョウジとケンイチは、お互いの顔を見合わせる。
日本人達の会話を聞き、ハンスが意外そうな顔をした。
「温泉か。『にほんじん』も好きなんだなぁ」
「も？　っつーと？」
驚いた顔をするケンイチの横で、キョウジがぽんと手を叩く。
「そういえば、この国の近くにも温泉の好きな国がありましたよね」
「ああ。風呂文化の進んだ国だよ。王都を挟んで反対側だから、みんなが関わることはないと思うが、隣国といえば隣国だな」
「確か火山があるから、鉱泉が沸いてるんでしたよね」
「そのはずだ。流石に詳しいな」
ハンスに褒められ、キョウジは照れくさそうに頭をかく。
「はぁー。この世界でも、温泉に入るやつってなぁー、いるんだなぁー」
「目が青い人が多いですから、予想外ですねぇ」

「そういう意味では、古代ローマとかもお風呂好きでしたし。関係ないんじゃないですかね？」
妙に感心しているケンイチとコウシロウに、キョウジが補足する。
納得したように頷くと、ケンイチは「そういえば」と、言葉を続けた。
「この辺りも山だからよぉ。探しゃーあんじゃねぇーの？　温泉」
「えぇー？　僕聞いたことないですよ？」
キョウジは大きく眉を顰め、記憶を探るように首を捻った。
街中や、その周囲の村々を往診して回っているキョウジは、この地域の情報にすこぶる詳しい。
そのキョウジですら聞いたことがないなら、かなり望み薄だろう。
「いや。森や山の中は危険だからな。確かめていない場所も有るとは思うが」
「なるほど、それはありますね」
ハンスの言葉に、キョウジが納得した顔を作る。
この辺りの森や山は魔獣が多く、ここのところ危険が少なくなってきたとはいえ、人間がおいそれと立ち入れる場所ではない。
数百人規模の軍隊ですら、回り道をするというのだから、その危険度は相当なものだ。
「となると、見つけんのもむずかしーわなぁー。ん？　いや、見つけんのはコウシロウさんの千里眼があるか？」
「いえ。私の目でも、目標がありませんとねぇ。ワラの中から針を見つけるようなものですよぉ」

苦笑しながら、コウシロウは首を振った。
万能に思われたコウシロウの千里眼だったが、実は意外な弱点がある。
どこにあるか分からないものは、見つけられないのだ。
衛星カメラのような視点を持つため、おおよその見当があれば見つけるのはたやすい。
だが、あてどなく探すとなると、複雑に入り乱れた絵の中から特定のキャラクターを探す絵本のように、途轍もなく面倒な作業になるのである。
「端から見ていくにしても、この辺りはとにかく広いですからねぇ」
「あ、いえ。俺がワリいっすから。考えなしっした」
申し訳なさそうに言うコウシロウに、ケンイチは慌てて頭を下げた。
皆の様子を眺めていたミツバが、ふいににやりと笑った。
何か思いついたらしく、喉の奥から不敵な笑い声を漏らしている。
「なに。どうしたのミツバちゃん」
嫌そうに尋ねるキョウジに、ミツバは「これでもか！」というほどのドヤ顔をテカらせた。
「自分に、いい考えがあるっす！」
そのとき、この場に居た全員が強烈に嫌な予感を覚えた。
一同が胡散臭そうな顔でにらんだが、ミツバは一切動じない。
後々これが大きな騒動を巻き起こすのではないか……そう、ミツバ以外の全員は、薄々感づいて

いたのであった。

2　目覚める女

辺り一面、鬱蒼とした森。
多くの魔獣が跋扈するそこは、人間が立ち入ることのできない場所だ。
そんな森の奥深くに、小さな洞窟があった。
天井に何ヵ所か、上空が見える穴が開いていて、内部は意外なほど明るい。大きな生物の気配はなく、居るのは精々昆虫か植物程度である。
突然、空気が揺らいだ。
まるで蜃気楼か陽炎のように空間が歪み、奇怪な光景を作り上げる。
最初は広く洞窟内部に分散していた歪みは、だんだんと一ヵ所に集約し始めた。コップの水の表面にできた波紋が、そのふちに当たり再び中心に集まっていく様に似ている。
人一人分ほどの大きさまで凝縮された歪みは、じわじわと滲むように色を帯び、激しく波打ちながら、ある形状を成していく。
それは、長い黒髪を持った、人間の姿だった。

歪みの代わりに生み出されたのは、目を閉じて、中空に横たわるように浮く一人の若い女性だったのである。
黒髪に、白い肌。わずかに目じりが下がっており、タレ目気味なのが分かる。
丸みがかった顔の輪郭は、見る者に可愛らしい印象を与えるだろう。
ゆったりとしたシャツと、ショートパンツのようなものを着ている。
どうやら女性自身に意識はないらしく、脱力した体は水の中を漂泊する木の葉のようにしばらく空中を彷徨った後、やがてゆっくり地面へ下りていく。
女性の体が地面に触れ、その全身が横たわると、それまで忘れられていた重力が、俄かに戻ってきた。
浮いていた髪と服の裾が、地面に落下する。
女性は、地面にあお向けになったまま身じろぎもしない。
その光景は、数瞬前まで確かに起こっていた異質な現象を全く想像させなかった。

「ってー……カラダいてぇー……」
その女性、「スヤマ・イツカ」は、痛む体をさすりながらむっくりと上半身を起こした。
半分寝ぼけたような表情でイツカは周りを見回し、表情をこわばらせる。
頭の中には、大量の疑問符が飛んでいた。

おかしい。
寝る前は自宅に居た筈なのに、ここは、いったいドコだ？
周りを見回しても薄暗く、土や岩の壁があるだけだった。
天井のところどころに外へ繋がる穴が空いており、そこから差し込む光のおかげで辺りの様子が分かる。
立ち上がってみると、天井までの高さは、おおよそ四メートル程度だろうか。
大まかな目測であるため確証は持てなかったが、歩き回っても頭を打つ心配はなさそうだ。
どうやらここは、どこかの洞窟の中らしい。
「なんなのよ、ここ……」
そう呟いた、次の瞬間。
イツカは体の中で何かが蠢くのを感じた。
「うをぉっ！　なになになに!?」
突然の違和感に、イツカは不快気に体をよじる。
体内の何かは、腹部から胸、首へと迫上がり、頭へ上ってきた。
そして、額からズルリと抜け出し体外へ排出される。
体を震わせながらも、イツカは焦った表情で自分の体から抜け出したものを探す。
すぐに見つかったそれは、実体のない、光の塊のようなものだった。

ガスや煙などの粒子とも違う。それは、緑や紫、赤など、めまぐるしく色を変えながら、ぐにぐにと空中を漂っていた。
「おいおいおい、マンガやアニメじゃねぇぞ……なにこれ……」
人間の頭ほどの大きさのあるその塊に向かって、イツカは手を伸ばす。
すると、突然その塊がブルリと震えた。
「うおぉ!?」
慌てて手を引っ込めるイツカをよそに、その塊の振動はどんどん激しさを増していく。
そして、その震えが頂点に達したと思しき瞬間。
空間から滲み出るように、真黒い球状の物体が姿を現した。金属なのか石材なのか、素材はよく分からない。つるりとした硬質の物体は、重力に逆らって中空にぴたりと静止している。
あまりの衝撃で、イツカはあんぐりと口をあけて固まった。
「私は、貴方の能力によって生み出されたものです」
「ひぃっ!?」
突然響いた声に、イツカは思わず変な悲鳴を上げる。
慌てて周囲を見渡すが、声を出しそうなものは発見できなかった。
音がした方向にあるのは、宙に浮いている球体のみだ。
イツカは表情を引きつらせたまま、球体へと顔を向けた。

「声を出したのって、これ？」
「そのとおりです」
イツカの問いに答えたのは、やはり球体であった。
声がする瞬間、球体の表面が僅かに振動している。
おそらく、その作用によって音を発生させているのだろう。
なんとなく、昔見たＳＦ映画の人工知能を搭載したコンピュータの声を連想させる。
そんな風に、イツカは感じていた。
無機質で感情がこもっていない、男性の声。
最近流行の朗読プログラムなどに似ているが、それよりもずっと滑らかに聞こえる。
イツカは生唾をゴクリと呑み込むと、恐る恐る球体に話しかけた。
「なに、ここ。っていうか、どうなってるの？　どこよここ……いや、いやいやいや、待って、ゴメン、ちょっと落ち着く」
大きくかぶりを振り、イツカは自分を落ち着けるように息を吸い込んだ。
二度、三度と深呼吸を繰り返し、最後にゆっくりと息を吐き出す。
「よし、落ち着いた。まず、貴方は今、私の質問に答えてくれたの？　質問したら、答えてくれるってこと？」
「はい。そのために現れました」

すらすらと出てくる言葉に、イツカは苦虫を噛み潰したような表情をする。
状況を認めたくなくて、思い切り自分の頬を抓ってみた。
当たり前というかやはりというか、痛みは確かに感じた。
「まあ、いてぇわなぁ。痛くて起きたんだし。ははは……」
どこか遠い目で呟くイツカ。しかし、すぐさま気合を入れるように顔を叩いた。
「なら、今の状況をできるだけ私に分かるように説明してくれる？　言っておくけど、私あんまり理解力ないから。ヨロシク」
「了解しました。順を追って説明します」
この状態では、冷静に質問するのは難しい。
そう判断したイツカは、球状の物体に説明を委ねることにした。
球体はそれを引き受け、言葉を発し始める。
「まず、ここは異世界です」
「おうふっ!?」
飛び出した単語に、イツカは大きく体をのけぞらせた。
顔を覆い、大きく嘆息する。
オーバーリアクションの理由はいろいろあるが、その一番大きいものは、「ここが異世界だということに、納得してしまった」ことだった。

普通ならば、馬鹿げた話だと切り捨てるだろうその言葉を、イツカは即座に、事実であると受け入れてしまったのだ。これはいったい、どういうことなのだろう。
「お気づきと思いますが、説明がスムーズに行えるよう、ここが異世界であるという認識はすでに植え付けられています」
「ああ、そうなのね」
疲れたような半笑いが漏れる。
乾いた声が洞窟に響く中、球体は説明を続ける。
「貴方がここに連れてこられた経緯、理由などは、私には一切登録されていません。少なくともここは、貴方が元々住んでいた地球という惑星でないことは確かです」
「はぁー……了解了解」
「現在地ですが、人里から遠く離れた洞窟の中、ということしか登録されていません。少なくとも、貴方の足で数日以内の距離に、人間が住んでいる領域はありません」
「マジか……」
イツカは打ちひしがれたように、がっくりと顔を伏せた。
この球体が嘘を言っている可能性もあるが、それは限りなく低いだろうと思った。
まず理由に心当たりはないし、そもそもそれはありえないと、イツカの無意識が不思議と訴えかけてくるからだ。

「次に、私についてです。私の言葉を抵抗なく受け入れてくださったことと思いますが、それは不自然なことではありません」
「というと？」
「私が、貴方の能力によって形作られているものだからです」
「能力？　能力……」
その言葉を聞いたとたん、イツカの中に何か閃くものがあった。
こめかみに指を当てて、頭の中に意識を集中する。
すると、視界にパソコン画面のモニターのような光景が広がった。
そこに映し出されているのは、文字と数字である。
一番目立つ上の部分に、でかでかと踊っている文字を見て、イツカは思わず乾いた笑いを漏らす。
――ステータス。
おそらく自分にしか見えないであろう画面には、そう書かれていたのだ。

どうやら自分は異世界に連れて来られて、けったいな能力を植え付けられたらしい。
そこまで理解したイツカは、次に自分がどの程度の能力があるのかが気になっていた。
早速、ステータスを確認しようとして、ふとあることを思いつき球体に顔を向ける。
「ねぇ。貴方は私の能力で作られたって言ってたけど、どういうことなの？」

「それも、順を追って説明させていただきたいと思いますが、よろしいですか？」
「あ、ああ、ゴメンゴメン。どうぞ」
自分で説明しろと言っておいて、球体の話の腰を折っていたことに気がつき、イツカはばつが悪そうに先を促した。
「すでにステータスは確認していただけたようですね。では、その中から、特殊能力という欄を探してみてください」
「特殊能力ね。あった。ええと、ダンジョンマスター？」
そこに書かれている単語を読み上げ、イツカは首を捻った。
どういうことか理解できず、説明を探そうとするが、どうやらそれ以上の情報は書かれていないようだ。
「能力、ダンジョンマスター。これは、ダンジョンを作り上げ、管理し、掌握する能力です。私は、それをサポートするためのツールなのです」
「ツール……つまり、私の能力の一部が、貴方ってこと？」
「そのとおりです」
イツカは大きくかぶりを振り、天を仰いだ。
何故か、この球体が言っていることは、するすると受け入れられる。
今も、聞けば聞くほど荒唐無稽な話なのに、「そうなんだな」とやはり腑に落ちてしまっていた。

「貴方は私の一部で、外に記憶を取っておくためのものってこと？　生体コンピュータみたいなもの？」
「そのとおりです。私は貴方自身であり、貴方がダンジョンマスターとしての力を遺憾なく発揮するための存在なのです」
「はっはっは……ああ、そーなのねぇー」
疲れきったような笑いを浮かべながら、イツカは、ふと、思い立ったアイデアを試してみた。
球体に、動くように念を送ってみたのである。
といっても、イツカには、少なくとも本人が知る限り念話などの能力は備わっていない。
念を送るというか、「そうなれ！」と、強く念じただけであった。
すると、球体に変化が起きる。
ゆっくりとではあるが、イツカの念じた方向へ動き始めたのだ。
念じただけなので、声にも仕草にも出していない。
「お察しのとおり、念じるだけである程度の操作は可能です」
「みたいね……」
「ただ、私はサポートを主体とするユニットですので、激しい動きをすることはできません」
「なるほどね」
「念じることでもある程度指示は可能ですが、思考は移ろいやすく、不確かである場合が多くあります。そのため、口頭での命令が最も優先されます。よろしければ、言葉でご命令ください」
そこまで言われたところで、イツカは念を送るのを中止した。
もはや、疑う余地はないだろう。
少なくとも、現在のイツカの頭では、球体の話を疑う材料を探し出すことができなかった。
何より、それで自分の中で、しっくりきてしまっているのだ。
納得してしまっているものを覆すのは、なかなか難しい。
「先ほども言いましたが、貴方が能力を持たされここに連れて来られた理由は、私にも分かりません。ですが、何かしなければいけない仕事や使命がある、といったことは、一切ないようです」
「それも貴方に記録されてるわけ？」
「そのとおりです。少なくとも貴方をここに連れて来た何かは、貴方にその能力で何かをするようにという指示を出していません。つまり、貴方は自由です」
自由という言葉に、イツカはやはり笑いしか出なかった。
自由と言えば聞こえはいいが、実質、することは決まっているのだろう。
そして、この球体は、それを知りながらそう言ったのである。
そのことも、イツカには分かってしまっていた。
この球体が自分の一部であるという言葉の意味が、イツカにはこのとき僅かではあるが理解できたような気がした。

「じゃあ、私は何をすればいいと思う？」
「ここから人里へ降りるという選択肢は、不可能に近いと考えられます。私には一番近くの人がいる場所への行き方、周辺の地図などは、記録されていません」
淡い期待すらも即座に否定されて、イツカはがっくりと肩を落とす。
どうせ、この周囲の地図とか、そんな便利な機能は入っていないのだろうと予想はしていた。
だが、実際にバッサリ言い切られてしまうと、それはそれで事実が重くのしかかるようで、なかなかのダメージである。
「ですので、この洞窟を拠点にした、ダンジョンの製作を推奨します」
「まあ、そうなるでしょうね……」
「ここは狭く、大型の危険な生命体が進入し難い場所です。この状態のまま内部を整えれば、比較的安全に洞窟をダンジョン化できるでしょう。それからここである程度まで力を蓄えれば、この世界の人間との接触も可能になると考えられます」
「なるほど。なるほどね……あああぁー……」
イツカはごろりと地面の上に寝転がり、大きく伸びをした。体に砂がついても、あまり不快に感じない。ここが意外なほど乾燥していて、地が滑らかなためだ。
湿った土や小石などが少ないので、肌に張り付いてこないのだ。
少しはすごしやすそうだと、イツカは思った。

「なんにしても、私の能力について詳しく分からないと、どうしようもないわねぇー……」
「そのとおりかと思われます」
イツカは体を起こすと、球体へ改めて顔を向けた。
つるりとした表面のそれは、やはり何でできているか不明である。
そもそも、イツカの体内から出て来た何かが、形をとったものなのだ。
石とか金属とか、それ以前の問題なのかもしれない。
「貴方、名前は？」
イツカの問いに、球体は微動だにせず、言葉を発する。
「ジャビコ。先ほど貴方が付けてくださいました」
確かにそれは、イツカが名付けた名前だ。口には一切出さず、頭の中だけで思い浮かべたものなのだが。
ジャビコというのは、イツカが過去に見た映画だったかアニメだったかに登場した、近未来のコンピュータの名前を捩ったものだ。最先端の性能を持ち、人語を解しコミュニケーションが可能なそのコンピュータは、イツカが抱いた球体のイメージとぴったり一致していた。
そういえば、そのアニメのコンピュータの声とジャビコの声も、どこか似ている。
「ねぇ、ジャビコ。貴方のその声って、私の記憶からきてるの？」
「そのとおりです。貴方は最も理解しやすく、馴染みやすい声を選ばれています」

「たしかに、分かりやすいし馴染みやすいわ」
球体、ジャビコの言うとおり、イツカにとってその声は実に耳触りの良いものだった。
おそらく自分の無意識が、そう選択したのだろう。
悪くないチョイスではなかろうか。
そう思って、イツカはほんの少しだけいい気分になった。
「まあ、とりあえず。よろしくね、ジャビコ」
「こちらこそ、よろしくお願いします」
丁寧な言葉で答えるジャビコの表面を、イツカは掌で撫でた。
ひんやりした冷たさと、つるりとしたその質感に、イツカはぴくりと手を震わせる。
だが、なかなか悪くない手触りだ。
いや、むしろ好ましいかもしれない。
イツカはこの洞窟で目覚めてから初めて、楽しそうな笑みを浮かべた。

3　球とダンジョンを作ることにした女

スヤマ・イツカは、オタク系女子だ。

年齢は三十を超えており、職場ではいわゆるお局様の域に片足を突っ込んでいたが、今のところ結婚の予定はなかった。
男と付き合ったことが、ないわけではない。
だが、最後にそういうことがあったのは実に数年前であり、今ではすっかり男日照り状態だ。
願望がないわけではないのだが、今はそれよりもアニメやゲーム、マンガなどに時間を費やす方が楽しかった。
自身もそういった類の作品を創作しており、男性と男性が恋愛しちゃってる小説などを書いて悦に入っている。
不思議なもので、イツカの妄想丸出しの小説でも、インターネットに上げれば、少なからず反響があった。
これが存外好評なのだから、世の中分からない。
そんな腐った女子であるイツカにも、急に消えたら心配する家族がいる。
両親と、既婚者である兄と、妹だ。
老人の域に入っている両親は、すでにイツカの結婚を諦めたようだった。
その代わりといっては何だが、兄と妹には三人ずつ子供がいる。
おかげで両親の攻撃が、嫁に行かない自分に来ないことに、イツカは深い感謝と嫉妬を覚えていたりした。

リア充は、爆発すればよいのだ。
とはいえ、姪っ子と甥っ子達はなかなかに可愛らしく、一緒に遊ぶのは楽しくはあるのだが。
そんなわけで、繰り返すようだが、まさにイツカはよくいる三十路のオタク系女子であった。
三十過ぎて女子ってどうなのよ、という意見は断固、受け付けない。
女は、いつまで経っても女子なのである。
だが、女子とはいえ、三十というのは、いろいろと曲がり角なお年頃だ。
肌とかなんやかんやで衰えてきているし、学生の頃にした無茶もできなくなってきた。
イツカもご多分に漏れず、そういったものに悩まされている歳であった。

――はずで、あったのだが。
「なんか私、若返ってねぇ？」
洞窟内を歩いていたイツカは、足元の湧水を覗き込んで呟いた。
そこに映っているのは、どういうわけか高校生ぐらいの自分の姿である。
高校ぐらいというのは、イツカ史上で最も美しかった、一般的には中の上ほどの外見だった時代だ。
とはいえ、当時は外見に一切頓着しておらず、夜更かしをしては目の下には隈を作り、ぼっさぼさの髪で過ごしていたのだが。

「そのとおりです。現在、貴方の肉体年齢は、実際の年齢である三十八歳よりも二十歳若い、十八歳になっています」
イツカの呟きに律儀に答えたのは、彼女の能力によって作り出された球体であった。
空中に浮遊する黒い硬質の塊、ジャビコの言葉に、イツカは静かに拳を震わせる。
「ジャビコ。私の実年齢は、トップシークレットね。絶対に漏らさないように」
「了解しました。イツカの実年齢は、以降、機密事項扱いになります」
機械的なジャビコの返答に、イツカは溜め息を吐く。
覗き込んでいた湧水から離れると、改めてジャビコの前に立った。
「それで、私のこの外見の変化も能力の一つなの？」
「そのとおりです。貴方の肉体年齢は、能力を使うのに最適な状態に変化し、保たれています。また、ある程度の身体的不調からも保護されています」
「つまり？」
「病気になりにくく、毒などに多少強くなっているということです。即死性の病や毒でない限り、時間経過と共に治癒していきます」
「便利でいいけど、人間じゃなくなってる感じがするわぁ」
呆れたような微妙な表情を浮かべながら、イツカは力なく笑う。
ジャビコの言葉を信じるならば、確かに多少人間離れした体になっているといえるだろう。

人間の外見年齢が若返るなど、聞いたことがない。
いや、あるにはあるが、ここまで急激なものは少なくともイツカは耳にしたことも見たこともなかった。
とはいえイツカが感じたのは驚きだけであり、恐怖とか、大きな違和感などはなかった。
妙な話だが、イツカは自分が若返っているという事実を、驚きながらも受け入れていた。
「このなんか妙に納得しちゃうのも、植えつけられた認識ってヤツなのね」
納得しながら、イツカはぼりぼりと頭を掻いた。
指に絡み付く髪の毛が、サラサラしている。
十八歳の頃の体でも、ここまでサラサラではなかっただろう。
イツカは不審に思い、自分の髪をつまんでじっと見つめた。
サラサラだ。
イツカの人生の中で、これほど髪の毛がつややかに輝いていた時代はなかったはずである。
「ねぇ、ジャビコ。私これ、かなり美化されてない？　さっき水に映した顔もだいぶなんかこう、イケてるような、ないような」
「現在の貴方の体は、最高の状態に保たれています。睡眠不足や不摂生などによるダメージがない状態ですので、最高のパフォーマンスを発揮していると言っていいでしょう」
「つまり、これは私本来のモテスペックってこと？　今なら中の上じゃなくて、上の下とか中に食

立ち読みサンプルはここまで

い込めるんじゃない？」
イツカは若干頬を上気させて、ジャビコを見つめた。
心なしか、目元や全身がわざとらしくキラキラ輝いている気がする。
返答を待つイツカだったが、ジャビコは微動だにしない。
元々、空中に静止したまま動かないジャビコだったが、気のせいか現在は凍り付いているように見えた。
「なんとか言ってよ」
「どう返答すべきか検索していました」
「いいの見つかった？」
「ぷぎゃー」
「ぶっ飛ばすぞ」
拳を握り締めるイツカだったが、殴るのは止めておいた。
なんとなく自分の拳の方がやられそうな気がしたからだ。
実際、触った感覚ではジャビコは相当に硬そうだった。
場合によっては、敵に投げるのもありだろう。
「それで。私の能力についての説明の続き、お願いできる？」
「了解しました。では、まずは貴方の能力の概要について説明します」